

「二〇〇八年度本試験 第一問」次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

1 いまここであらためて、歴史とは何か、という問いをたてることにする。大きすぎる問いなので、問いを限定しなくてはならない。中島敦が「文字禍」で登場人物に問わせたように、歴史とはあったことをいうのか、それとも書かれたことをいうのか、ともう一度問うてみよう。

事は、無かった事じゃ」と断定的に答える。すると博士の頭上に、歴史を刻んだ粘土板の山が崩れおちてきて命を奪ってしまうのだった。あたかも、そう断定した博士の誤りをただすかのように。こういう物語を書いた中島敦自身の答は、宙づりのままである。

2 たしかに、書かれなくても、言い伝えられ、記憶されていることがある。書かれたとしても、サンイツし、無に帰してしまうことがある。たとえば 私が生涯に生きたことの多くは、仮に私自身が「自分史」などを試みたとしても、書かれずに終わる。そんなものは歴史の中の微粒子のような一要素にすぎないが、それがナポレオンの一生ならば、もちろんそれは歴史の一要素であるどころか、歴史そのものということになる。ナポレオンについて書かれた無数の文書があり、これからもまだ推定され、確定され、新たに書かれる事柄があるだろう。だから「書かれなかった事は、無かった事じゃ」と断定することはできない。もちろん「書かれた事は、有った事じゃ」ということもできないのだ。

3 さしあたって歴史は、書かれたこと、書かれなかったこと、あったこと、ありえたこと、なかったことの間にもたがっており、**固定することのできないあいまいな霧のような領域を果てなく広げている**、というしかない。歴史学が、そのようなあいまいな領域をどんなに排除しようとしても、**歴史学の存在**そのものが、この巨大な領域に支えられ、養われている。この巨大な領域のわずかな情報を与えてきたのは、長い間、神話であり、詩であり、劇であり、無数の伝承、物語、フィクションであった。

4 **歴史の問題**が「記憶」の問題として思考される、という傾向が顕著になったのはそれほど昔のことではない。歴史とはただ遺跡や史料の集積と解説ではなく、それらを含めた記憶の行為であることに注意がむけられるようになった。史料とは、記憶されたことの記録であるから、記憶の記憶である。歴史とは個人と集団の記憶とその操作であり、記憶するという行為をみちびく**主体性と主観性なしにはありえない**。つまり出来事を記憶する人間の**欲望、感情、身体、経験**を**チヨウエイツしてはありえない**のだ。

5 歴史を、記憶の一形態とみなそうとしたのは、おそらく**歴史の過大な求心力から離脱しようとする別の歴史的思考の要請**であった。歴史は、ある国、ある社会の代表的な価値観によって中心化され、その国あるいは**社会の成員の自己像(アイデンティティ)**を構成するような役割をになってきたからである。歴史とは、そのような自己像をめぐる戦い、言葉とイメージの闘争の歴史でもあった。歴史における勝者がある以前に、歴史そのものが、他の無数の言葉とイメージの間にあって、**相対的に勝ちをおさめてきた言葉でありイメージ**なのだ。

e x 3をまたいだ同一対象への言及
(歴史の母体である「記憶」の領域の膨大さ)
※人間の脳機能以外の「記憶」領域によって自説を補佐

e x 4 をまたいだ同一対象への言及から、
末端のディスリ構文の内容を特定する

6 あるいは情報技術における記憶装置（メモリー）の役割さえも、歴史を記憶としてとらえるために一役買ったかもしれない。熱力学的な差異としての物質の記憶、遺伝子という記憶、これらの記憶形態の延長上にある記憶として人間の歴史を見つめることも、やはり歴史をめぐる抗争の間に、別の微粒子を見出し、別の運動を発見する。キカイになりえたのだ。歴史的に歴史をほるかに上回る記憶のひろがりの中にあって、歴史は局限され、一定の中心にむけて等質化された記憶の束にすぎない。歴史は人間だけのものだが、記憶の方は、人間の歴史をほるかに上回るひろがり

7 歴史という概念そのものに、何か強迫的な性質が含まれている。歴史は、さまざまな形で個人の生を決定してきた。個人から集団を貫通する記憶の集積として、いま現存する言語、制度、慣習、法、技術、経済、建築、設備、道具などのすべてを形成し、保存し、破壊し、改造し、再生し、新たに作りだしてきた数えきれない成果、そのような成果すべての集積として、歴史は私を決定する。私の身体、思考、私の感情、欲望

40 さえも、歴史に決定されている。人間であること、この場所、この瞬間に生まれ、存在すること、あるいは死ぬことが、ことごとく歴史の限定（シンコウをもつ人々はそれを神の決定とみなすことであろう）であり、歴史の効果、作用であるといえる。

8 にもかかわらず、そのようなすべての決定から、私は自由になろうとする。死ぬことは、歴史の決定であると同時に、自然の決定にしたがって歴史から解放されることである。いや死ぬ前にも、私は、いつでも歴史から自由であることができた。私の自由な選択や行動や抵抗がなければ、そのような自由の集積や混沌がなければ、そもそも歴史そのものが存在しえなかった。

9 たとえばいま、私はこの文章を書くことも書かないこともできる、という最小の自由をもっているではないか。生活苦を覚悟の上で、私は会社をやめることもやめないこともできるといふような自由をもち、自由にもとづく選択をしよう。そのような自由は、実に乏しい自由であるともいえるし、見方によっては大きな自由であるともいえる。そのような大小の自由が、歴史の中には、歴史の強制力や決定力と何らムジユンすることなく含まれている。歴史を作ってきたのは、惻愴な選択であると同時に、多くの気まぐれな、盲目的な選択や偶然でもあった。

10 歴史は偶然であるのか、必然であるのか、そういう問いを私はたてようとしているのではない。歴史に対して、私の自由はあるのかどうか、と問っているのだ。その問うことにはたして意味があるのかどうか、さらに問ってみるのだ。けれども、決して私は歴史からの完全な自由を欲しているのではないし、歴史をまったく無にしたいと思っっているのでもない。歴史とは、無数の他者の行為、力、声、思考、夢の痕跡にほかならない。それらとともにも喜びであり、苦しみであり、重さなのである。

〔注〕 ○ 「文字禍」——中島敦（一九〇九—一九四二）の短編小説。

（宇野邦一『反歴史論』）

【exのグループ分け・設定課題・デイスリの解消地点の確認】

① exのあら読みと **設定課題** の把握、**結末** (8・10段落) からのデイスリ構文の曖昧さの解消

「歴史学の存在のあり方」として、「歴史とは」(設定課題)

↓無数の **個々人の気まぐれな選択の自由**、行為の痕跡の積み重ねという **混沌とした巨大な「記憶」の広がり** そのものが、**歴史学が思考すべき歴史にほかならない。**

強制力や決定力を持った(狭義の)歴史は自由の集積であるこの広義の歴史のなかに矛盾なく内包される小集合であり、その存在の基盤である個々人の大小の自由意志を否定し去ることはない。

個々人の自由とは自由を選択し続けた先人の巨大な「記憶」とともに生きる思いそのものなのである。

② exのグループ分け(文章のなかの対立関係が何となくつかめれば十分)

「文字禍」の博士の考え方(ex1)

↓歴史として勝ち残った記述の内容だけが存在を許される**歴史の強制力や決定力**

↓歴史の物量(粘土質)的**重みによって報復を受ける**

「勝ち残った歴史」至上主義に対する**反証**

↓**量的に歴史をはるかに上回る記憶のひろがり** **の中に中心化された国の歴史は包摂される**

∴記録されない膨大な事象の存在と、漠然と生成される曖昧な歴史言説の存在(ex2)

&(人間の記憶とは別に事実を残す様々なかたちの記憶装置、記憶形態が存在する(ex3))

個々の自由な選択や行動、抵抗の蓄積こそが「強制力を伴う歴史」を生み出す前提条件(ex4)

③ **主なレトリックを使ってexの説明を試みる**⇨**筆者の構想の中にあつたストーリーを再構築**

※最後の傍線部付近のレトリックまでここで見つけられていたならば、ほとんどの場合「二〇字記述までここで得点できる目処が立つ。最初の方のレトリックは後半で解きほぐされていることが多いので、あとの方のへ〜で回収理解される伏線であれば、気にとめる必要は無い。

国や社会の価値観によって中心化された、強制力を伴う「歴史」(ex1)だけを礼賛する者は、報復を受ける⇨**へr1 粘土板の重みで圧死する**⇨とされている。

この**いわゆる狭義の「歴史」**は、書かれずに終わる些細な出来事や人々の記憶(⇨**r2 微粒子**)⇨(ex2)や、別の形態の装置が残す記憶(ex3)の(⇨**r4別の微粒子**)⇨によって出来ている(⇨**r3境界なくあいまいに、巨大に蓄積された量的な広がり**)⇨の中にあり、それなしでは成立できない。つまりそれらの出来事を記憶する行為者の**主体性と主観性、欲望、感情を超越する絶対的なものではない**。それら行為者の些細な自由な選択は、**見方によっては大きい**と言えることができる(ex4)。

歴史学が扱うべき歴史とは、むしろ**狭義の歴史**の根源である**蓄積された人々の記憶の痕跡**、およびそれと**共感する**⇨**へr5 個々の行為者の感情とその微粒子の重み**⇨である。

問一 「歴史学の存在そのものが、この巨大な領域に支えられ、養われている」（傍線部ア）とあるが、どういうことか、説明せよ。

問二 「歴史そのものが、他の無数の言葉とイメージの間にあつて、相対的に勝ちをおさめてきた言葉でありイメージなのだ」（傍線部イ）とあるが、どういうことか、説明せよ。

問三 「記憶の方は、人間の歴史をはるかに上回るひろがりと深さをもっている」（傍線部ウ）とあるが、それはなぜか、説明せよ。

問四 「歴史という概念そのものに、何か強迫的な性質が含まれている」（傍線部エ）とあるが、どういうことか、説明せよ。

問五 筆者は「それらとともにあることの喜びであり、苦しみであり、重さなのである」（傍線部オ）と歴史についてのべているが、どういうことか、一〇〇字以上一二〇字以内で説明せよ。（句読点も一字として数える。なお採点においては、表記についても考慮する。）

問六 傍線部 a、b、c、d、e のカタカナに相当する漢字を楷書で書け。

- a サニイツ b チョウエツ c キカイ d シンコウ e ムジユン

※ 宇野邦一『反歴史論』（せりか書房 刊）（第3章 歴史のカタストロフ 1 歴史を引き裂く時間）の前半部分。